

Title	日本の数学(小倉金之助著, 岩波書店発行)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.2 (1940. 9) ,p.171(373)- 173(375)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0172">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0172</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 書評

## 南部文書

(吉野朝史蹟調査會  
編輯並發行)

本書は山梨縣身延町住の男爵南部日實氏傳襲の古文書を各時代に互つて採録し且つ同文書の參考として諸家寺院所傳の文書若干を收載し、更に南部男爵家に流入保藏の曾我氏文書を合載し、卷末に八戸家系、八戸家傳記を附收したものである。

抑も南部家は源義光の孫光行、甲斐國南部莊を領したるを以て南部氏と稱し、其の三男實長分れて一家を成し、波木井郷等を領有し鎌倉幕府の家人となり、適々日蓮に歸依し、後、身延山に延請し、その教化を崇信し子孫其の地に繁榮し、元弘建武の亂世、其の後裔一族甲斐より躍然として京都に馳參じ、錦旗の下に忠勤を抽んじ、鎮守府大將軍北畠顯家皇子義良親王を奉じ陸奥に下向するや、南部師行は顯家を輔け國司代として八戸に鎮し、顯家の西上に隨ひ和泉石津に於ける合戦には主従共に壯烈なる戦死を遂げ、其の後、弟政長は遺志を繼ぎ八戸に残り、強敵曾我氏を擊攘し大功を樹てしを始め子孫一族よく父祖の遺訓を遵守し、一意吉野朝に忠誠を致しその事績燦然として青史に光彩を放つて居る。八代政光の時、本貫甲斐國を去つて八戸に居を移し、三十二代直榮の時、遠野(岩手縣)に移りしも、現時一族は甲斐國に歸住せ

られてゐる。かく再三移封のことあり、又幾多世相の變遷ありしが、子孫よくこの重要文書を護持し今日に至りしは寔に感服し至上の追孝と稱すべきである。かの九州北端の五條男爵家文書と陸奥北端のこの南部家文書とは實に我が國土兩端僻遠の地に於ける勤王諸士の業績を千載に傳ふる不朽の史料と云ふべきである。明治九年七月東北御巡幸の砌、南部家文書は畏くも天覽に供へられ更に明治三十年後裔行義は祖先の忠節嘉せられて特に男爵を賜はる無上の光榮に浴したのである。

昭和十二年創立の吉野朝史蹟調査會にては豫て東國地方の史料史蹟の研究と顯彰に當りしに、昨年醍醐天皇六百年の御祭典に際會せしを以て、本書の上梓を企劃したものと云ふ。本書中、特筆すべきは元弘より元中に至る六十年間、南部氏子々孫々五代相承けて僻地に孤忠を守り堅節を完うし屢々勸感を忝うし、厚き恩賞を拜せしを證する繪旨國宣等數十通である。就中、後醍醐天皇の安堵繪旨、後村上天皇の髻繪旨等は一族年來の軍忠を深く嘉賞あらせられしもので、降つて朝鮮陣に際し秀吉に隨從して九州に至りし南部信直の同地よりの書狀數通は文祿役當年に於ける旺盛なる志氣を想見すべきものである。又曾我氏文書は鎌倉時代陸奥に蟠居せし一族の勢威を語る史料である。

終りに南部男爵家の繁榮を祈り併せて吉野朝史蹟調査會に敬意を表する次第である。(昭和十五年五月廿二日、武田勝藏)

## 日本の數學

(小倉金之助著  
岩波書店發行)

我が國の數學史に關する論著は決して皆無ではない。「大日本數學史」(遠藤利貞著、明治二十九年刊)、「増修日本數學史」(同氏著、大正七年刊)、「日本數學史」(徳永重康校閲、水木梢著、昭和三年刊)、「日本數學史講話」(澤田吾一著、昭和三年刊)、「日本數學概説」(林鶴一校閲、岡專吉著、昭和八年刊)等、それに屬するものは幾種かある。しかし一般普及性の點から云へば、今度岩波新書の一冊として發刊せられた小倉金之助氏の「日本の數學」に如くものは、まだ曾てなかつたらう。その意味から本書は啓蒙的に極めて意義深きものを持つと云はねばなるまい。

數學が、我が國に於いて、如何にして生れ、如何にして發達したか、そして又、それはどんなものであり、何故にさうなつたのか。かう云つたことは必ずしも獨り數學專攻者のみの知らんとする問題ではない筈である。學問や思想文化に少しでも關心を有する人々にとつて、それは亦尠なからざる興味の對象たり得るに違ひない。和算と呼ばれて、特に徳川時代にあつて非常な輝かしい發達を遂げた我が國の數學は、我が國民の獨創性を最もよく發揮したものの一として、我が國の學問や思想文化を語る場合に、到底除外することの出来ない存在なのである。

本書は即ち此の問題を、和算の創始から説き起して、それが我が國独自の展開をみせた経緯を述べ、最後に鎖國封建の社會崩壊に伴ひ、それを時代的背景として飛躍し、特色づけられた和算も必然同じ運命を辿らねばならなかつた事情から、和算に對して新しく輸入せられた洋算による近代の數學の確立に至るまでを、専ら平易に概観してゐる。ラヂオ講演を基として成つたといはれる

だけに、その記述の仕方の如何にも親しみ易く、目次の如きでも第一日和算のはじまり、第二日和算の發展、第三日和算の成熟とその特色、第四日和算の特色(つゞき)と、洋算の輸入、第五日近代の數學の確立といふ五章を設けて「一日分を一時半がかりで、ゆつくりと、五日間、お読み願へば——」といつた具合である。その上、殆んど毎頁にわたつて挿入された豊富な寫眞版は、それを觀ることだけでも充分參考になるし、ラヂオ講演では聞くことの出来ない本書の特徴ともなつて、良い意味での大衆性を一層加へてゐる。そして一般大衆には兎角迂遠と思はれ勝ちな數學の、我國に於ける發展過程を、いつか氣輕に會得させるといふわけである。

一體、同好の研究者等の間では、ほんの常識的な事柄であつても、それが一般には往々新しい知識であることは珍らしくない。また學術的研究論著は、一般人の讀物としては、煩瑣に堪えないものが屢々である。そのためにも、高尚な學術研究の成果の普及を目的とする著作は、常に大いに歡迎されて然るべきであらうと思ふ。たゞその場合、最も留意するべきは、大衆性を強調するの餘りに、著述の態度が少しでも卑俗に陥つたり、大衆に媚びすぎたりしては斷じてならないことである。その點本書の如きは實に以て範とするに足りよう。

平素考へてゐる「科學史」といふものの性格だけは、出来るだけ崩さないで、やつて見たつもりだとは、著者の非常に謙虚な言葉である。先に世界の數學史を展望せる「數學史研究」(昭和十年刊)を世に問はれたことのある著者として、その世界史的觀點に

立つ系統的な論旨は、とりわけ本書の注目すべき長所の一をなし、近時稍々もすれば我が文化の優越性を指摘すること急にして、世界史との比較に就いても、單に年代的な己れのみに依る議論も間あるに、こゝでは、それが飽くまで當時の社會文化事情や學問上の傳統を考慮に於いて立論されてゐることは、最も公正な態度と云ふべきである。要するに、本書は極く初歩的な小冊ではありながら、我が數學史の概要を正しい視野から興趣豊かに把握するための最も恰好な手引きである。數學史、數學教育史等に關する論著を既に幾冊か公にされてゐる著者をまつてこそ、或は此の著が可能であつたのかも知れない。(會田倉吉)

### 宮城縣遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告

(東北帝國大學法文學部  
奥羽資料調査部研究報告第二)

先に利府村大澤瓦窯址に關する研究を公にされた東北帝國大學法文學部奥羽資料調査部から同部研究報告第二冊として伊東信雄氏執筆の表記の如き報告書が發刊された。前回もその紹介の筆を執り、同調査部の發展を祈つて止まなかつた筆者が再び第二冊に就いて紹介をなし得ることは單に自分一個の喜びではない。

今回は小牛田町西南約一軒に在る素山貝塚に關する報告であり、伊東信雄氏を主査として法文學部學生諸君の考古學實習の爲舉行された發掘調査の公表である。

本書の體裁は六章に分れ、先づ從來の所見を舊幕府時代迄遡つて探索し、次いで位置に關する考察、發掘經過、出土遺物及びそ

の考察、結論と順を追つて述べられたる所、大體一般の斯學報告書と規を一にして居る。

發掘は昭和十三年六月十二日より廿四日に亙つて行はれ、處女層と認められるA地點、攪亂の跡あるB地點の二個所が發掘された。而してB地點には小さい封土を有する奈良朝と見られる古墳が存し、二個の土師器が發見されて居る。

貝塚關係としては多數の條痕土器、繩文條痕土器、沈線文土器(著書の分類に従ふ)、石器類がある。伊東氏は第五章出土遺物の考察に於いて主として出土土器に就いて精細なる比較研究を行はれそれ等が關東地方の田方下層式、茅山式、東北地方の槻木下層式同上層式、北海道の住吉式等と並行する極めて古式のものとして本遺蹟を以て槻木貝塚と共に陸前地方最古の貝塚とされた。石器としては打製石器が壓倒的であり、石鋏、石篋が多く出ること最も注意するべきであらう。

右の如く本貝塚の發掘は從來充分なる研究がなされなかつた此の地方の前期繩文式遺跡の調査として著者の述べられる如く重大な意義を有するものであり、繩文式文化研究上大きな貢獻をなしたことは疑ひない。

併し乍ら出土器類の分類、編年特に田方下層式近似の一群に就いては尙疑問の點が少くないと思はれるのであり、著者伊東氏を始め斯界權威者の一層の研究を期待するものである。

とまれ本書は前期繩文式文化研究には看過し難き貴重な文獻であり、多數の優秀なる土器の圖版、挿繪は錦上花を添へるが如く、本書の價値を一層高めて居る。又副産物たる一古墳は出土物こそ